

敦賀の歴史と鐘

石井 左近

本稿は、敦賀を中心として現在も残っている鐘、また敦賀に存在していたと伝えられる鐘につながる歴史を述べる。もちろん鐘そのものの工芸的文化的価値を述べようとするのではない。

県内の銅鐘で早くから国宝に指定され、昭和二十七年十一月に改めて国宝になったのは、敦賀市の常宮神社所蔵の朝鮮鐘である。

常宮神社の鐘

この鐘は朝鮮鐘の中の新羅鐘に属する逸品であつて、豊臣秀吉が朝鮮戦役の際に、敦賀城主の大谷吉継に命じて、慶長二年二月二十九日に常宮神社に寄進せしめたものと伝えられている。

秀吉が文祿の朝鮮戦役に敦賀にも船役を課した。水主を六十七人とし、船舶の徴せられた数は詳かでないが、道川季信の甥の左近右衛門は大谷吉継の軍に従い船頭となり、塩谷新五郎は軍船を監したという。正

徳五年正月に記された道川文書に拠れば「吉継より季信に軍船を課せらる、このとき季信手船十八艘あり、船を築紫に赴け朝鮮に渡らんとす云々」とあり、また渡海に功ありとて吉継より、左近右衛門は敦賀の町年寄を命ぜられたとある。また疋田記に拠れば「疋田から小頭一、人夫三人、以上四人出す、一人の扶持米式人分下さる、女房の扶持まで下され候、大谷人惣人数千二百人、四番備なり、郡中から小頭共に三百人渡海仕と云えり、浦辺は家数百軒に水主人出すよし、十万石に大船三艘、中船五艘、一万石につき人夫三百人と云う、小頭松田六左衛門十七歳にて渡海、廿三歳の夏の頃疋田へかへり申され候、其の外、彌介、三右衛門、善右衛門、中にも彌介は、ねはんの絵取、定広院へ寄進仕候也」とある。これによつても秀吉の征韓の役と敦賀との関係が深い。そして秀吉の重臣であつた大谷吉継をして寄進せしめるのに不思議はないであろう。

天明四年に東遊に旅立つた橋南谿が、この鐘の音を聞きたいと思つて、常宮に参詣

したことが東遊記後編に見えている。越前名蹟考に所載の東遊記の一節に拠れば「越前国敦賀の常宮に詣しに、此鐘尋常の物ならずと人々いふに、近く寄て是を見れば、龍頭の傍に穴有て、全体の形古雅なり、銘を見れば朝鮮の文なり、豊臣公の頃大谷刑部此地に主宰として在し時、朝鮮国より持ち来りし鐘を此宮に献せしと云伝ふ。其銘文甚読み難し、此音を聞ん事をおもへど、撞くこと禁制と云う札を掛けたり、入相には撞くよしをきけば、入相にはかならず聞へしと思ひしに、言葉石の爲めに、さゞるの岳に登りて夜に入りて帰りしかば、又入相の鐘の音をも聞かず、残念云んばかりなし云々」とある。この鐘は今を去る千二百一十四年前で、西暦八百三十三年にあたる彼の国の大和七年に鑄造されたものである。

劔神社の鐘

丹生郡織田町の劔神社に所蔵されている鐘は、わが国で鑄造された奈良朝時代の鐘で、在銘では最も古いものの一つであつて既に国宝に指定されていたが、今年三月改めて国宝に指定されたのである。鐘銘は草

の間一区に十六字を三行に、劔御子寺鐘、神護景雲四、年九月十一日と陽鑄してある。

敦賀にはこの鐘について伝説がある。その要領は、敦賀郡粟野村助生野の宮内地籍に鎮座されていた織田神社の御神体と鐘を丹生郡織田に遷されるとき、鐘を運漕中に敦賀の海に誤って落し海底に沈んだので、更に劔神社の鐘を遷したと、語り伝えられているのである。

敦賀郡粟野村助生野の宮内地籍には現在も劔神社が鎮座され、式内の古社で新抄格勅符抄に劔御子神三十戸越前宝龜二年充二十戸天平神護元年九月七日封十戸とある。その他に続日本紀、三代実録などの国史にも所載されているゆかりの顯著な古名社である。もと神域に三百坊と呼ぶ地名がある。ここに往古は社僧の宿坊があったと伝えられているが、今は粟野小学校の敷地となっている。この劔神社の南方にあたる同一の山麓に古宮の旧址がある。ここが往昔の織田神社の鎮座の趾であるという。

俳聖の芭蕉が元祿二年八月に敦賀を訪れたみぎりに「仲秋の夜、つるが泊りぬ、あ

るじの物がたりに、此の海に鐘の沈みて侍るを、国の守のあまを入れて尋させ給へど、龍頭下さまに落て引揚べきたよりもなしと聞く」と題して「月いづこかねは沈める海の底」と吟じていることによつて、古くからの沈鐘伝説であることを知ることが出来るであろう。

永蔵寺の時の鐘

この鐘はもと敦賀市一向堂町（相生町）に在った時の鐘である、打它宗貞の妻の清月尼が寛文五年八月の年八十歳の時に発意して鑄造せしめたもので、今から二百九十二年前のことである。鐘銘は長文であるからここでは省略するが、この鐘は、一般に時計のなかつた時代であるから、敦賀港の出舟入舟や近隣遠村の人々に専ら時間を報知するための鐘で、寺鐘とはその用途を異にしてしている。火事の場合にも撞いたが、この鐘を撞けば、町奉行も出場せねばならなかつたのである。明治二十二年に一向堂町の鐘楼から敦賀町役場に移され、午前五時から夜十時まで時間毎に撞いた。大正の頃から正午だけ撞いたのであつたが、文化が

進んで大和田銀行のサイレンが鳴るようになり、町から市に發展し、庁舎も移転しサイレンが備わつたので、打它氏の檀那寺の永蔵寺に移された。歴史的ゆかりの深い鐘である。

金前寺の鐘

この寺は泰澄の創建といい、氣比神宮の密蔵院であり、吉野朝の時代には尊良、恒良兩親王の御座所となつた。元龜年間の兵戦で焼失し、その後安孫子淨泉の女が再建した。鐘は寛文年間に打它宗貞の寄進したもので、鎌倉、室町時代の様式であり、鐘銘に金林寺とあるが、一時は寺名を金林寺と称した歴史的資料ともなっている。

金前寺も永蔵寺もともに戦災に罹かつたが、幸に鐘は災を免れ異状はなかつた。金前寺の鐘は近年に至つて遠敷郡に移動した由を聞いている。

一の 卷号
一の 頁
五上 段
一行 敦賀
一行 正
一行 敦賀
一行 誤